

加藤茂夫先生との物語

福原康司
経営学部准教授

これは私の青春物語の一つです。登場人物は、加藤茂夫先生とその不肖な弟子の私、そしてそれらを取り巻くとても温かい人たちです。しばしおつき合い頂ければ幸いです。

専修大学経営学部に入學したばかりの私は、翌年の大學受験を志すいわゆる仮面浪人として、「出る単（「試験にでる英単語」という当時受験生のバイブル書）」や参考書をぺらぺらとめくりながら、講義を聴くような学生でした。そのような学生でしたから、講義担当者が講義内容から脱線して雑談を始めると、「しめしめ」とばかりに仮面浪人としての内職を始めるのでした。1年次の経営学に関する基礎的な知識を学ぶ必修科目は、「経営学総論（現在は「経営入門A・B」と名称変更）」と呼ばれていました。当時は、現在のようにオムニバス形式で年間を通して複数の講義担当者が変わるのではなく、ちょうど今の「経営管理総論A・B」のように、学籍番号を4ないし5つのクラスに区分して、一人の担当者が通年同じクラスを担当するスキームで講義が展開されていました。翌年の大學受験に失敗した場合のリスクヘッジとして2年次から3年次へ進級する際の留年を避けるために、「そこそこの単位、とりわけ専門の必修科目は修得しておきたい」という思惑もあって、押さえておく科目群に当然ながら「経営学総論」は入っていました。

大学の講義に出て最初に受けたカルチャーショックは、高校までならあり得ない独自のスタイルで講義を行う先生が多いことでした。とりわけ専門科目はどちらかと言えば理論に重きを置いた内容が多く、即実践できるようなことが学べるだろうと思って経営学部を志望した私にとって、退屈に感じるものが少なくありませんでした。そのような講義が多い中で、毎回新聞記事を配布して、高校を卒業したばかりで経営実践の現場をまったく理解していない学生たちに、少しでもリアリティをもって経営学を感じてもらいたいと工夫を凝らされた「経営学総論」は、数少ない面白いと思える科目の一つでした。しかも、その講義担当者は、しょっちゅう講義内容から脱線して雑談をするので、当初は内職をするのに好都合な時間帯だったのが、気がつくと四方山話に引き込まれているのです。不本意入学というコンプレックスを抱えた私にとって、先生が誇らしげに専修大学の自慢話をされる様子にどこか救われた気がしたからです。後に、その先生も専修大学経営学部を

ご卒業されたことを知り、専修大学はきちんと研究者を育てているしっかりとした大学だと思うようになりました。嫌々通っていた大学への足取りが少し軽くなり、「いつまでも腐ってないでこの大学で自分を鍛えよう」、いつしかそう思えるようになっていました。そんな専修大学のアイデンティティを自分に与えてくれた方が、当時「経営学総論」をご担当されていた加藤先生だったのです。後に師と仰ぐようになる先生との運命の出逢いは、今からちょうど25年前の平成3年の春でした。

2年次秋のゼミ選考の時期になると、当然私は加藤先生のゼミを志願しました。加藤ゼミしか眼中になかった私は、何ら迷いがなかったので今さらゼミの様子を知る必要もないだろうと、公開ゼミは参加しませんでした。というのは大義名分で、学習塾の講師のアルバイトをしていた私は、自分の担当している授業と加藤ゼミの公開ゼミが重なっていたのです。個別指導塾ならシフトの変更が比較的容易ですが、集団学習塾でしたので、担当授業に何周も続けて穴をあけるわけにもいかず（ゼミ選考の面接試験の時は当然休まなければならないので）、実は公開ゼミに参加したくとも参加できない事情がありました。ですが、公開ゼミが終わった頃、「加藤ゼミは公開ゼミの参加者をチェックしていて、参加してない人は自動的に落とされるらしいよ」という驚愕の噂が、クラスの友人を通じて私の耳に入ってきたのです。彼は北海道人会に入っており、顧問をされていた加藤先生と接点があったので、その裏情報を入手してきたのです。

「これはマズイことになった」。慌てふためく私を尻目に、その友人は、「今度北海道人会の用件で加藤先生のところに行くから一緒に行って釈明したら？」とつぶやいてくれたのです。選考では、面接に先駆けて、志望動機等を書かせた履歴書や成績証明書に加え、課題レポートの提出があり、英語の筆記試験も課されるなど、かなり強気な選考方法が採用されていました。裏を返すと、それくらい超人気ゼミでしたので（私が受験した時は63名の応募があったと聞いています）、何としてもこの不利な状況を打開しなければと、友人に伴って研究室に行き必死に事情を説明すると加藤先生から返ってきたのは、「そんなの知らないわ」と非常に素っ気ない一言でした。「あー、これで入ゼミの可能性は潰えた…。落胆しながら友人とキャンパスから駅へ下山していると、「君さあ、さっき加藤先生の研究室に来た人だよな？」と、突如後ろから声をかけてくる人がいたのです。気が動転していて、研究室に居合わせた人の顔は記憶から完全に抹消されていたので、「そう言えばゼミ生らしき人たちが研究室にいたなあ」程度にしか声をかけられた時は思い出せませんでした。「僕も塾講のバイトしてるから事情はよく分かるよ。あの後加藤先生に僕からも言っておいたから、きっと大丈夫。君、千葉だったよね。僕も千葉なんで、We love Chibaのよしみだよ、カッ、カッ、カー」と高笑いしながら話を続けたその人は、後に加藤ゼミの先輩として私を大学院進学の道に誘うきっかけとなり、現在は順天堂大学で教鞭をとられている水野基樹先生でした。「世の中というのは、実に人との出会いが人生を左右するな」と思う出来事でした。かくて、選考試験にパスして無事加藤ゼミ17期のゼミナリストとして大学生活を送ることができるようになったのです。

その頃、加藤ゼミには「有利（向ヶ丘遊園駅北口にある多摩区役所の手前の右手辺りにかつてありました）」という行きつけの飲み屋があって、ゼミが終わった後は毎週必ずそこに加藤先生とゼミ生とが飲みに行きました。ご年配のママが一人で切り盛りしていて、どんなに飲んでも2000円ぽっきりと学生のお財布にとっても優しいお店です。賞味期限の切れた調味料（マヨネーズやソース）がたまに置いてあって、それに気づかず使用した人は腹痛になるなんてご愛嬌もしばしばありましたが、ママの人柄が好きで足繁く通う常連客も多かったです（専大出身のスピードスケートの黒岩

彰さんもよくいらしてました)。小さな居酒屋でしたので常連の社会人とも話す機会が多く、大人との会話も自然と学べ、アットホームな雰囲気に包まれた場でした。ゼミ生だった時の加藤先生の年齢に自分自身が近づこうとしている今、改めて敬服するのは、毎週欠かさずゼミ生に付き合っただけに行かれていたことです。しかも、飲んだ後にゼミ生を引き連れ、読売ランド駅からほど近いモンタナという加藤先生行きつけのスナックに場所を変え、率先してカラオケで歌われていました。勢い、大学近隣に独り暮らしをしている学生宅に上がり込んで一杯やる（私の同期のゼミ長だった西田浩君の部屋に先生は何度か足を運んで一緒に一杯やった記憶があります）なんてこともありました。こんなパワーが今の私にあるかと聞かれると、いささか自信がなくなります。それほど、ゼミ生を愛してやまない先生でした。

ゼミ生活が終わろうとする頃、バブル崩壊後の就職氷河期1期生として就活をしていた私は、大手電機メーカーから内々定を取り消されたり、その後内定をもらった大手会計ソフト会社に内定式後色々拘束を受けたりと、さんざん憂き目に遭い、このまま卒業して企業で働くことに不安や疑念を抱くようになりました。こうした苦い経験が自分のキャリア選択を真剣に考える契機となり、アルバイトの塾講師の経験を通じて、漠然と人に教えることが好きな自分に気づくようになりました。そして、大学卒業後は、通信教育で教職の免許を取ろうと思い始めたのです。そのことを加藤先生に相談すると、「大学院に進学すれば教職の免許も取れるし、これからは高校の先生とて大学院で高度な研究を修める時代だ」と言われ、修士課程進学を決意するのです。4年生の12月に決めたものですから、翌年2月の大学院受験に向けて準備期間はそれほどなく、試験は及第点ギリギリで何とか拾ってもらいました。面接試験で出牛正芳先生（後に専修大学長・理事長になられ一昨年ご逝去されました）に、「君は加藤先生のゼミ生なのに、なぜ加藤先生が担当している経営組織論の成績が悪いんだね？」と聞かれたことをついこの前のように記憶しています。片道2.5時間をかけて遠方から通学していた私にとって、木曜1限の同授業に無遅刻無欠席で参加し、しかも試験の手応えも悪くなかったのにB評価しかもらえなかったことが非常に不服だったので、「それが悔しくて大学院進学を志しました」と即答したのを今も鮮明に覚えています。この成績評価をずっと根に持っていた私は、ことあるたび話題に触れるのですが、決まって先生からは、「おまえはポイントがズレてるんだよ」と一蹴されるのがオチでした。

腰掛けで修士課程に進学したので、ひとまず形ばかりの修士論文を書き上げた頃、後にもう一人の恩師となる高澤十四久先生から、どういう訳か博士課程進学を勧められました。当時博士課程は英語の他に第二外国語の受験が必須で、しかも研究者というキャリアなど考えたことのなかった私にとって、思いもよらない話でした。ただし、高澤先生から出された条件は、どうせ第二外国語の受験勉強を一年かけてするのなら、もう一年修士課程に残り修士論文も全面的に書き直しなさいというのです。加藤先生はもとより、学費のスポンサーになる両親にも相談し、結局博士課程に進学することを決意しました。加藤先生や高澤先生のサポートはもちろん、加藤ゼミの先輩で当時明治学院大学の博士課程に在籍されており、現在石巻専修大学の杉田博先生から熱心にドイツ語をご教頂いたおかげもあって、博士課程に卡ろうじて合格することができました。

博士課程に進学するといよいよキャリア選択が研究者一本に狭められてくるので、進学したからには研究をしっかりとしなければという気負いがありました。しかしながら、加藤先生は基本的に放任主義で、厳しく研究指導する先生ではありません。このスタンスはひとそれぞれだと思いますが、私にとっては非常に良かったように思います。まず、他人から何か強引に押しつけられるとす

ぐに反発したくなる性分なので、研究テーマの設定からその研究方法まで本人に自由裁量を与えて下さったことは、私の自由な研究着想の苗床となりました。また、とかく指導教員は自分が担当している院生を囲い込みたがる傾向にありますが、放任主義を貫く加藤先生は、研究をする上で私が誰から指導を受けようと、嫌な顔一つしませんでした。当然、研究者として論理を積み重ねる訓練は独学ではなかなかできませんので、持ち前のフットワークの良さも手伝って、私は学内外の様々な研究者から指導を受ける機会を得ました。それが研究者として知識や人脈の幅を広げていき、おかげさまで財産として現在もその恩恵にあずかっています。こうした放任はややもすれば、糸の切れた凧のように身勝手な研究活動を行う温床になりかねません。ですが、博士課程在学中に私の研究者としての心構えや論理的思考の礎を厳しくも温かく築いてくれた人達が、加藤先生の周りに多くいたことも幸いしたように思われます。それが、先述の高澤先生であり、兄弟子の杉田先生と水野先生、そして当時大学院を卒業して経営学部に進級気鋭の研究者として着任してきたばかりの馬場杉夫先生や蔡芒錫先生でした。大学院時代から切磋琢磨してきた同僚の間嶋崇先生の存在も、私にとって大事な凧糸のアンカー役になっていました。つまり、加藤先生を慕い集う人たちから、私は加藤先生を媒介して間接的にご指導ご鞭撻を賜っていたことになります。このように、加藤先生はメタファーとしてよく用いられる「バルーン型」を、まさに教育の上でも実践されてきたと言えるでしょう。

学生時代から「お前は生意気だなあ」よくと言われるくらい自己主張の強い私を同じ職場の同僚として招いてくれ、同僚になってからも幾度となく意見の食い違うことがあっても、最後は「よか、よか（加藤先生の恩師で九州男児の中野繁喜先生の口癖が移ったのだそうです）」と言って、すべてを包み込みように受け入れて下さいました。加藤先生のような器の大きさを、きっと私は生涯身につけられないと思います。それでも、そんな教育者としての鏡に自分を常に映し出しながら、加藤先生の思いを継いで母校専修大学の成長発展に微力ながら貢献して参りたいと思います。

大学院修士課程時代をともに学び、専修大学入職の同期でもある青木章通先生が、かつて「加藤先生は経営学部の太陽だから」とおっしゃったことが脳裏に刻まれています。大きな太陽を失ってしまうことは、専修大学経営学部にとっても、とても残念で寂しいことではありますが、定年退職後も加藤茂夫先生のご健康とご活躍を祈念しつつ、物語を終わらせて頂きます。

今までありがとうございました。そして、これからもよろしくごお願い申し上げます。